

# AAALA NEWS

Asian American Literature Association, Japan  
December 2023 No.63

- AALANewsNo.63 では、9月に開催された第31回 AALA フォーラムの様子をお届けします。「アジア系（アメリカ）文学研究と翻訳」をテーマとした今回のフォーラムは、対面と Zoom による遠隔を混ぜたハイフレックス形式で開催されました。吉原真里氏の特別講演では、最新のご著書『不機嫌な英語たち』を中心に、日本／アメリカ、日本語／英語、研究者／作家の間を行き来してきた吉原氏の執筆人生がたっぷりと語られました。後半は司会を務めた中地幸氏との対談形式でした。シンポジウムでは、麻生享志氏、トーマス・ブルック氏、濱田麻矢氏の3名の発表者と、コメンテーターの小林富久子氏により、「翻訳」をめぐる議論が展開されました。詳しくは、井上明紀氏と早川真理子氏によるフォーラム参加記でも報告されていますので、ぜひご一読ください。また、特別講演とシンポジウムの内容については、2023年度中に発行予定の *AAALA Journal* No.29 でもお楽しみいただけます。
- 2023 年もアジア系アメリカ文学会の活動へのご尽力ありがとうございました。新しい年が平和と幸福で満たされることを祈っております。

(文責：渡邊真理香)

## 第 31 回 AALA フォーラム (AALA Forum 2023)

### アジア系 (アメリカ) 文学研究と翻訳

#### <プログラム>

日時：2023 年 9 月 24 日 (日) 9:50~16:40

会場：神戸大学人文学研究科 B 棟 1 階 132 教室 (視聴覚教室)

\*ランチョンは人文学研究科 A 棟 1 階学生ホール

※ハイフレックス開催 (Zoom 参加可能)

9:30~9:50 受付

9:50~10:00 開会の辞 山本秀行 (AALA 会長, 神戸大学)

10:00~12:00 「日本語/英語で書くときに私の書くこと」

“What I Write About When I Write in Japanese/English”

講師：吉原真里 氏 (ハワイ大学) [Prof. Mari Yoshihara, University of Hawaii]

司会：中地幸 (都留文科大学)

12:00~13:00 ランチョン

13:00~13:30 総会

13:30~16:30 シンポジウム「アジア系 (アメリカ) 文学研究と翻訳」

司会：山本秀行

講師：麻生享志 (早稲田大学)

トーマス・ブルック (追手門学院大学)

濱田麻矢 氏 (神戸大学, 中国文学)

コメンテーター：小林富久子 (早稲田大学[名])

16:30~16:40 閉会の辞 牧野理英 (AALA 副会長, 日本大学)

※本フォーラムは、JSPS 科学研究費 (基盤研究 (B) 「アジア系トランスボーダー文学」研究の包括的枠組創成と国際的ネットワーク構築」2023-25 年度) の助成を受けています。

#### <登壇者プロフィール・発表概要等>

##### [ 特別講演 ]

講演者紹介：吉原真里 氏 (Prof. Mari Yoshihara)

1968 年ニューヨーク生まれ。東京大学教養学部卒、米国ブラウン大学博士号取得。ハワイ大学アメリカ研究学部教授。専門はアメリカ文化史、アメリカ=アジア関係史、ジェンダー研究など。著書に『アメリカの大学院で成功する方法』、『ドット・コム・ラヴァーズーネット』、『性愛英語の基礎知識』(新潮新書)。

書)、『ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール——市民が育む芸術イベント』、『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか?——人種・ジェンダー・文化資本』、『親愛なるレニー——レナード・バーンスタインと戦後日本の物語』(第35回ミュージック・ペンクラブ賞、第80回日本エッセイスト・クラブ賞、第11回河合隼雄物語賞受賞)(以上アルテスパブリッシング)、共編著に『現代アメリカのキーワード』(中公新書)、共著に『私たちが声を上げるとき——アメリカを変えた10の問い』(共著、集英社新書)。英語の著書に、*Embracing the East: White Women and American Orientalism* (Oxford UP, 2002)、*Musicians from a Different Shore: Asians and Asian Americans in Classical Music* (Temple UP, 2007)、*Dearest Lenny: Letters from Japan and the Making of the World Maestro* (Oxford UP, 2019)など多数。水村美苗『日本語が亡びるとき』を英語に共訳。

※吉原氏の講演に引き続き、司会の中地氏との対談が行われました。対談の内容も含めて、近日刊行予定の *ALA Journal* No.29 (2023) に掲載されます。

### [ シンポジウム概要 ]

従来、著名な翻訳家の実践的な翻訳術、あるいは比較文学的視点から著名な翻訳文学の研究に重きを置いた日本特有の「翻訳論」とは異なる、欧米に起源を持つ「トランスレーション・スタディーズ」(Translation Studies)が、近年、日本でも注目されるようになってきた。

これまで、外国文学研究において、文学テキストの翻訳不可能性(untranslatability)ゆえに、翻訳ではなく、原典を読まなければならないという「原典至上主義」が自明のものとされてきた。一方、「翻訳大国」とも言える日本における外国文学研究において、翻訳された文学テキストは「原典」を読みことが困難な多くの読者を獲得し、その研究の裾野を広げてきた。このことは、アジア系アメリカ文学(研究)においても言える。たとえば、藤本和子訳のマキシム・ホン・キングストン『チャイナタウンの女武者』(晶文社、1978)、中山容訳のジョン・オカダ『ノー・ノー・ボーイ』(晶文社、1979)、大橋吉之輔訳のトシオ・モリ『カリフォルニア州ヨコハマ町』(毎日新聞社、1979)など、1970年代後半にアジア系アメリカ文学の古典の優れた翻訳が次々と出版されたことは、その後の日本におけるアジア系アメリカ研究の成立と発展に大いに貢献したことは言うまでもない。

また、山本秀行が研究代表を務める科研プロジェクト(「トランスボーダー日系文学」研究基盤構築と世界的展開——「世界文学」的普遍性の探究)2019-21年度基盤研究(B)、「アジア系トランスボーダー文学」研究の包括的枠組創成と国際的ネットワーク構築)2023-25年度基盤研究(B)における研究パースペクティブの一つ「トランスレーショナル(翻訳媒介)文学」では、村上春樹や多和田葉子などの翻訳と創作の関係あるいは日本語のテキストから外国語に翻訳されることによって生み出される言語的・文化的トランスボーダー性について研究を進めてきた。

このような背景を持つ本シンポジウム「アジア系(アメリカ)文学と翻訳」では、ヴェトナム系アメリカ文学の研究のみならず、ラン・カオの翻訳を手掛けてこられた麻生享志氏、リー

ビ英雄などのトランスナショナル文学を専門とし、トランスレーション・スタディーズにも精通されている気鋭の研究者トーマス・ブルック氏、現代中国女性文学の第一人者で張愛玲などの翻訳を手掛けてこられた濱田麻矢氏をシンポジストとしてご登壇いただく。さらに、日本におけるアジア系アメリカ文学研究、女性学を初期から牽引され、トリン・T・ミンハやモニカ・トゥルンなどヴェトナム系の翻訳を手掛けてこられた AALA 前会長の小林富久子氏にもコメントーターとしてご登壇いただく。本シンポジウムでは、文学研究としての翻訳、翻訳行為によって生み出される文学的創造性、あるいは言語だけでなく文化の翻訳による言語的・文化的トランスボーダー性など、翻訳の肯定的側面に焦点を当て、アジア系（アメリカ）文学の翻訳の関係についての発表・ディスカッションが活発に行われることを期待している。なお、各シンポジストの発表概要は以下の通りである。

(山本秀行)

### 【シンポジスト発表要旨】

「アーカイヴと翻訳——ヴェトナム系難民文学の「アフターライフ」

麻生享志（早稲田大学）

トランスレーション・スタディーズが注目を浴びるようになって久しい。ヴェトナム系では、「雑多なものの共存」を意図したトリン・ミンハが、「幾つかの言語、文化、現実をつなぎあわせひとつの総体とする」ことを「文化翻訳」ないしは文化の「ハイブリッド化」と呼ぶ。

一方、ヴェトナム系難民文学とは、多くの犠牲者の上に成り立つ、数少ない生存者が構築する文学である。それはベンヤミンがいう「アフターライフ」としての存在であり、それを多／他言語化して接ぎ足す翻訳作業は、その「アフターライフ」を「ポストメモリー」として広く共有するための手段である。また、脱越の歴史を人々の記憶に刻印するには、翻訳を含む難民文学の「アーカイヴ」化が求められる。

本発表では、ヴェトナム系難民文学における翻訳という行為を、実践と理論の双方から検証し、難民文学のアーカイヴ構築がもつ可能性について論じる。

「文脈依存の翻訳行為

——リービ英雄の日本語作品における英日翻訳の引用と表象に関する考察」

トーマス・ブルック（追手門学院大学）

創作の言語が作者にとっての「第一言語」でない場合、創作行為に翻訳行為が介在しているはずだとよく言われる。その過程を構想することはしかし、必ずしも容易ではない。一方、リービ英雄の日本語による文学作品では、語り手・視点人物が英語と日本語をはじめとする複数の言語に囲まれながら翻訳行為に関与している様子がしばしば描写されている。本発表では、リービの作品における、こうした翻訳行為の前景化を作者自身の創作行為と関連づけて考察したい。具体的には、作者がかつて英訳した『万葉集』の英訳がそのまま引用された後、和訳された英語の証言が次々に引用される展開を持つ短編「宣教師学校五十年史」(2015)を取り上げ、こうした作品内のいわばパフォーマティブな翻訳行為が、作者による創作行為という作品外の

文脈と絡み合うことにより、他言語への翻訳困難性とも結びつく、高度に文脈に依存した文学的な価値が生み出される過程を明らかにする。

#### 「カノンを攪乱するテキスト——イーユン・リーの描く中国」

濱田麻矢 氏（神戸大学、中国文学）

母親、母語、母国から遠く離れて英語創作を続けているイーユン・リーは、自作を中国語に翻訳することも拒否しているという点で英語創作華人作家の中でも特異な存在だが、彼女の創作の多くは中国を対象としている。まず医学を志し、留学先で創作を始め、中国の救いようのない現実を容赦なく描くことから、彼女の文学的態度はよく魯迅と比べられてきたが、リーは「自分は魯迅を好まない」と、中国文学のカノンからの決別を宣言した。本報告では、極めて「魯迅的」な彼女のテキスト、*The Vagrant* を中心にリーと中国及び魯迅との距離について考えたい。

#### <フォーラム参加記>

2023年9月24日、第31回 AALA フォーラムが開催された。今年は Zoom と対面のハイフレックス開催で、会場は神戸大学だった。はじめに開会の言葉として AALA 会長の山本秀行先生から今回のフォーラムについてお話をいただいた。午前中の部の特別講演は、ハワイ大学吉原真里先生が講師としてお話くださった。最新作『不機嫌な英語たち』（2023年9月26日発売）の出版間近であった吉原先生からは、「日本語／英語で書くときに私の書くこと（What I write about when I write in Japanese/English）」と題してお話を伺った。講演は中地幸先生の司会で進行ののち、『不機嫌な英語たち』を先にお読みになっていたという中地先生と山本先生からの質疑があった。そのやりとりの中では、日本語でも英語でも複数の著作をお持ちの吉原先生がアメリカで本を出す時にどのように見られるか、というお話があった。ご自身のエピソードを添えながら、Asian と Asian American には固有の違いがある、意識においても経験においても Japanese と Japanese American の文学の間にも（例えば収容所体験のような）違いがあるはずなのに、全てを一緒くたにするのはどうなのか、という問題意識から、同じ内容の本を出版するにしても日本語で先に書くのかどうか順番を考える、とおっしゃっていた。

ランチョンと総会を挟んで始まったシンポジウムは、「アジア系（アメリカ）文学研究と翻訳」という題であった。山本先生の司会のもと、講師として麻生享志先生、トーマス・ブルック先生、濱田麻矢先生がそれぞれ話をしてくださった。麻生先生は「アーカイヴと翻訳——ヴェトナム系難民文学の「アフターライフ」」として、「文化翻訳」について発表いただいた。ヴェトナム戦争というものがなければ本来は存在し得なかったヴェトナム系難民文学であるが、ヴェトナム系のアメリカ作家の中ではクリエイティブ・ライティングで教育を受けた作家が増えているという。難民社会の歴史や事件について描く中でも、Lan Cao は丁寧に描写する一方で Viet Thanh Nguyen は読者に話かりやすいようには書かないといった興味深い指摘が並んだ。ブルック先生は「文脈依存の翻訳行為——リービ英雄の日

本語作品における英日翻訳の引用と表象に関する考察」という題で発表して下さった。まずは、「リービ英雄は translational なのか」という問いがあり、翻訳を主題的に扱っているリービ作品を取り上げ、作者がかつて自身で翻訳した『万葉集』の英訳が登場する間テクスト性の高い「宣教師学校五十年史」(2015)を掘り下げた。リービ英雄が西洋出身の作家である点に着目し、言語的複数性から一種の文脈上の翻訳困難性、文脈依存性が生まれうるという点から、トランスレーショナルな文学である、という刺激的なお話だった。中国文学がご専門の濱田先生は「カノンを攪乱するテキスト——イーユン・リーの描く中国」という発表をしてくださった。今回は *The Vagrant* (2009) を取り上げ、Yiyun Li の描く中国についてお話が進んだ。留学先で創作を始めたことや中国の描き方といった共通点から、Li は魯迅と比較されることがあるが、濱田先生によると、Li 自身は継承関係を否定しているものの魯迅からの影響は否めないという。「魯迅的」とされるテキストである *The Vagrant* のストーリーを実際に起きた事件と比較する中で、今でいうところの「わきまえる」ことをしなかった者たちについてのお話や、歴史や文学の中で切り取られる身体、死体について話が及んだ。Li は私も研究対象にしているが、濱田先生のお話からは私が今まで考えてこなかった側面を伺うことができ、大変勉強させていただいた。最後に小林富久子先生からシンポジストの先生方へのコメントをいただいた。保守派によるフェミニズムへのバックラッシュ、ポストフェミニズム的現象、#MeToo 運動を踏まえた第四波フェミニズムなどを踏まえたフェミニズム批評のお話を共有していただいた上で、中国フェミニズムに関する質問、ヴェトナム難民と「日本人」の距離感、ウクライナ難民のメディアでの扱われ方の問題、翻訳に関しては方言、書き言葉と話し言葉が翻訳にどのように関係すると思われるかといった、小林先生の着眼点からの鋭い質問を提起があり、シンポジストの先生方の回答を伺うことができた。

交通費なども安くはないことから普段は Zoom 参加することが多い私だが、会場で参加できて非常にいい時間を過ごすことができた。お昼の時間もランチョンを食べながら他の参加者の方々と話すこともできた。AALA の先生方とお会いすることもでき、フォーラムの前後では「対面では初めましてですね」というような挨拶も交わすことができたことも、対面開催ならではのありがたい時間であった。

井上明紀 (都留文科大学[院])

第 31 回 AALA フォーラム「アジア系 (アメリカ) 文学研究と翻訳」に参加をさせていただきました。新型コロナウイルス流行から 4 年ぶりに対面形式と遠隔形式という二つの会場で同時開催され、先生方のご講演をお聞きできる大変貴重な機会となりました。

午前の部では、吉原真里先生による、「日本語／英語で書くときに私の書くこと」という特別講演が行われました。ハワイから zoom を通してご講演いただき、日本語・英語で書かれた先生のご著書の執筆と出版過程において、言語の種類や、本の性質、出版社や読者の反応など様々な側面を考慮されてきたことについてお教えいただきました。特に、英語で書かれたご著書を日本語に翻訳された作品について、異なる言語を使用する読者は共通

の前提も異なるため、日本語の読者に対して背景をもっと説明すれば良かったとお話しただいたことは印象的でした。

ご講演の中では、新たに出版される私小説『不機嫌な英語たち』についても、中地幸先生、山本秀行先生との対談形式でお話しいただきました。小説と学術論文との違いから、子ども時代のエピソードやジェンダーと結びつく内容の対談、さらに、作品内の朗読も行われました。私自身も後に作品を拝読させていただき、軽やかにアメリカ本土、ハワイ、日本を行き来する中で、二つの言語と二つの国で生きることの単純とは言えない心情や、異なる背景を持った人々との心の寄り添いと別れが語られ、終始ドキドキしながら拝読させていただきました。

午後の部では、麻生享志先生、トーマス・ブルック先生、濱田麻矢先生、コメンテーターである小林富久子先生によるシンポジウムが行われました。まず、麻生享志先生による「アーカイヴと翻訳——ヴェトナム系難民文学の『アフターライフ』」のご発表では、ラン・カオの著書モンキーブリッジのようにヴェトナム系の伝統文化が詳細に綴られている作品もある一方で、歴史を事前に把握しておかなくては読み進めることが難しい作品も存在していること、ヴェトナムの歴史を記憶に留めるためのアーカイヴ化について、権威付けのない、様々な感情が交差する場所としてのアーカイヴ構築が求められているという現状について学ばせていただきました。次に、トーマス・ブルック先生による「文脈依存の翻訳行為——リービ英雄の日本語作品における英日翻訳の引用と表象に関する考察」のご発表では、複数の国々で過ごしてきた作家リービ英雄についてお教えいただき、翻訳というテーマを作品内で深く考え続けてこられた重要な作家の一人であることを実感しました。リービ英雄と多和田葉子の作品の比較研究についての言及にも大変興味を持ちました。さらに、濱田麻矢先生による「カノンを攪乱するテキスト——イーユン・リーの描く中国」では、中国からアメリカへと渡った作家イーユン・リーの作品 *The Vagrants* を中心にご発表をいただきました。中国文学・文化の視点がふんだんに含まれており、声を上げた女性や、そのような女性へと向けられた男性からの視線について学びました。

AALA フォーラムへの参加を通して、複数の国や文化、言語の中で生きること、そして翻訳を行うことについて、私の中でも少しずつ考えを巡らせ始めました。

早川真理子（名古屋大学博士候補研究員）

## 総会報告

### 【2023年度 AALA 総会 議事録】

#### 1. 報告事項

##### (1) 2022年度（2022年4月1日～2023年3月31日）活動報告

##### ① 例会

5月例会 中止

7月例会（第144回） 7月16日（土） オンライン

11月例会（第145回） 11月26日（土）オンライン

1月例会（第146回） 2月19日（日）オンライン

3月例会（第147回） 3月11日（土）オンライン

2022年度総会にて、例会は基本的にオンライン開催とすることが承認済み

研究発表者および発表要旨は AALA News No.62 に掲載済み

② 第30回フォーラム（AALA Forum 2022）

9月25日（日）に早稲田大学早稲田キャンパス11号館で開催

プログラムや発表要旨は AALA News No.61 に掲載済み

③ AALA Journal

2022年12月31日付けで AALA Journal No.28 を発行

2022年度の AALA フォーラムを特集した

(2) 2022年度会計報告

2. 審議事項 すべて承認

(1) 2023年度（2023年4月1日～2024年3月31日）予算案

(2) 2023～2024年度役員・役割分担

<役員>

顧問：植木照代

東京地区：麻生享志、池野みさお、河原崎やす子、小林富久子、寺澤由紀子、

原恵理子、牧野理英

中部地区：小林純子、長畑明利、村山瑞穂

関西地区：荘中孝之、野崎京子、桧原美恵、深井美智子、古木圭子、松本ユキ、

前田悦子、山本秀行

中四国・九州地区：風早由佳、渡邊真理香

<役割分担>

会長：山本秀行

副会長：古木圭子、牧野理英

事務局：渡邊真理香（事務局長、業務全般、ホームページ管理運営）、松本ユキ（事務

局長補佐、例会案内・国内外広報）、深井美智子（会計・名簿）

例会企画委員：山本、古木、牧野、渡邊、松本、村山、風早

(3) 第32回 AALA フォーラム（35周年記念フォーラム）

(4) 2023年度後半～2024年度前半の活動予定

①例会：2023年11月18日（土）講演：Prof. Dorothy J. Wang (Williams College, USA)

研究発表：Sophia Hana Dicky (福岡女子大学[院])

2024年1月20日（土）講演：Dr. Spencer Tricker (Clark University, USA)

Dr. Tricker を囲んでのパネルディスカッション

パネリスト：宇沢美子、松川祐子



モデレーター：松本ユキ

2024年3月9日（土） 講演：Prof. Allan Isaac（Rutgers University, USA）

司会：牧野理英

※2024年度例会発表者募集中。

②*ALA Journal* No. 29 担当：渡邊真理香、山本秀行、古木圭子、Nathaniel Preston

2024年3月頃発行予定

③*ALA News* No. 63 担当：渡邊真理香

2023年12月下旬発行予定

④*ALA News* No. 64 担当：松本ユキ

2024年6月下旬発行予定

2023年度の例会要旨と第32回ALAフォーラム（35周年記念フォーラム）の予告 印刷したものも送付

（5）その他

①作家や作品を絞ったワークショップ（読書会の発展型）の開催

2024年度はWakako Yamauchiを特集

②*ALA Journal* 掲載料の見直し（2025年度総会で審議予定）

※ 追認審議：現在の掲載料

論文および研究ノート（ジャーナル10部進呈）：一般10,000円、学生5,000円

書評、文献解題、エッセイ等（ジャーナル5部進呈）：一般5,000円、学生3,000円

特別講演の講師などの招待論文については、掲載料無料（ジャーナル2部進呈）

**事務局だより**

<会費納入のお願い>

いつも会員の皆様には、会費を納入いただきましてありがとうございます。*AAJA Journal* No.28 を送付の際に、振込用紙を同封させていただいております。もし、未納の方がいらっしゃいましたら、どうぞよろしくお願い申し上げます。

<住所等変更について>

住所、所属、メールアドレス等に変更あるいは、事務局に連絡事項がございましたら、会費振り込み票に記入されるだけでなく、ご面倒ですが、事務局までメールでお知らせいただきますようお願い申し上げます。

aala.jp.office@gmail.com

<*AAJA Journal*バックナンバー購入のお願い>

*AAJA Journal*バックナンバー(在庫僅少の No.1 を除く)を1部 1,000 円でお送りしています。会費納入の際に、ご希望の号と冊数を振込用紙の「通信欄」にお書きいただくと簡単です。

<ジャーナルの執筆者負担>

ジャーナルの投稿論文掲載には、従来から、執筆者負担をお願いしています。負担金額に応じてバックナンバーをお送りしています。「文献解題」や「書評」については「論文」の半額、学生会員については、各区分の規定額の半額となります。研究費・校費等で支払いを希望される場合は事務局にご相談ください。

☆会費・執筆者負担等の振込先は以下の通りです(振込料金は振込者負担となります)。

[ 郵便振替口座番号 01180-1-75183 加入者名 アジア系アメリカ文学会 ]

**アジア系アメリカ文学会**

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1  
神戸大学人文学研究科山本秀行研究室内  
TEL&FAX: 078-803-5543

AAJA NEWS No.63 2023 年 12 月 17 日

編集担当: 渡邊真理香